水と人生

摩訶生

天地自然の凡ての現象、仔細に之を觀察すれば專門學者ならぬ吾人に於ても、亦多少の興味なきに非ず、茲に暫く此稿に於て語る處のもの、唯其幾千萬分の一斑ならむのみ、若し唯幸に年少讀者の爾後の精察のhintとなるをあらば、余の幸とする處なり。

我等人類の生息する此地球の表面の面積は、學者の說に從へば、約三千三百萬方里なり、而して我等人類の主として占領する陸地は、其約三分の一弱にして、他の三分の二强、即ち百分の七十二なる。

約二千四百萬方里は盡く水の蔽ふ處なり。

斯かる廣大なる面積を占めたる、水の我等人生に及ぼす影響、之れ吾人の先づ茲に考察するものなり。

末終に海となるべき山水も
しばし木の葉の下くぐるなり、

東奥の俚人亦歌ふ、

望ある身は岩間の清水
しばし木の葉の下を行く、

いでや、此韓信然たる木の葉の下の岩間の清水より觀察し始めむか。

彼は綠苔と親しみ荊棘雜草と交り、蓊鬱たる深

林中より、幽々として傳ひ、遲々として行き、幾度か石皺を滑り、岩嵩に憩ひ、又潺湲として囁き出でゝ、所謂溪をなし、時に小禽と遊び、昆蟲と慣る。

殿よ山行て溪水飲むな、碧い蜥蜴が身を冷す。

之れ熊野山中人跡稀なる里の質朴なる若婦が、誠を込めて其夫を誡めし歌に非ずや。

細溪小澗相湊合して、水量漸く加はり、砂を走らし礫を送り、漸く岸を搏ち、岩を嚙み、こゝに勇ましき波と麗はしき泡沫とを起し、忽ち斷崖を鋭く削り下る瀧となり、高く絶壁にかゝりて、轟々として夏尚寒き瀑となる。

旋轉沸騰又沸騰し、瀑潭より溢れ出でゝ亂石を蹴り白練を曳いて、急瀨となり、漸次に下りて、筏始めて蜿蜒として屈曲上下し岩角を掠めて走る

更に進めば、兩岸益平に、流勢亦從つて激しからず、薪を載せて輕舟上下する處、鰍、鮎などの屬、盛に躍る。

岸益達く、流愈緩に、大淀となり、深淵となり白帆來往稍繁く、時に黑煙を曳いて瀛船の入り來るに至つて、頓て帆柱林立黑煙天に漲る港に近づきしを悟る、波犢牛の脊の如く、唯ウネ〳〵として寬なり、色は藍よりも濃く、深さ數百尋遂に度るべからず。

底ひなき淵やはさわぐ、山川の
あさき瀨にこそあだ波はたて

又曰く、

地薄者大物不レ產　水淺者大魚不レ游
樹禿者大禽不レ捿　林疎者大獸不レ居

然り、寬仁大度にして、深遠度るべからざる者に

非ずば、以て大人たる能はず、以て將に將たる能はざるなり、吾人常に淵に對して此感なくんばあらざるなり。

而かも溪に於ける瀧に於ける奔流激湍亦無限の爽快を吾人に捧ぐるに非ずや、彼等は山岳切斷の大魔力と石礫泥濘の大運搬者たる能力とを有する壯漢に非ずして何ぞや、彼等は實に歷史に於ける革命の健兒なり、況んや亦之れ淵となり大人となるべき順程なるに於てをや。

是に於て乎、吾人は、水の川に於ける、彼洋々迫らす、寬弘よく百物を容るゝ深淵に親しむと、同時に、赤手空拳山谷を震動して驀然として躍り來る彼清溪急瀨を愛せざるを得ざるなり。

（未　完）

七　月（ふみ月又ふ月）

せく生

野も山も、里も田も、有ると有る草木ども、打ちはへて、皆青綠の今日このごろ、白樂天ならねども、眼を放にして青山を見、綠の陰の滴るわたり、煙草くゆらしつゝ、我が田打見る農夫等の早苗とりし五月頃より、水枯れもせん眞夏の「みな月」打過ぎて、積る丹精はやう〳〵に、田の面の稻に見えそめつ。穗ははらまれて、早きは出でゝ見ゆるなり。穗見月とも、穗含月とも、嘗て昔はいはれけむ。ふみ月の名の起原かな。

風通しよき我が書齊、思ふ樣に開け放ち、有りと有る文庫の底の書ども取出つゝ、次々に隣る間まで打ち曝せば、恐るゝ蠹魚の逃げ惑ふ樣、おかしとも憐なり。支那の曝書は七日なり。赧隆とか

いへる男、今日人が文ひろげ乾すならば、予とても一乾し乾して見んと、大きなる腹押出して、日に向ひ腹中の書多きを誇りけりと。斯る變人今尚ありや無しや。文披月なるが、ふみ月の名の起原かな。

「竹竿頭上願絲多」。「天の川とわたる舟の梶の葉に思ふことをも書き付くるかな」。

この月七日の夕文かきて棚機つ女に願ふ儀式、乞巧奠とぞいふ。昔支那より來し習慣、文かす事が、ふみ月の名の起原かな。

ふみ月の名のいはれ、いづれを眞といひ定め難けれとも、農の開けし我が國人の名づけゝむ「穂見月」こそ正しとやいはむ？。尚この月の異名を萬葉集日本書紀などにもとづけて、咏み出せる歌ども

文　披　月　（有家朝臣）

七夕の逢ふ夜の空の影見えて
かきならべたるふみひろげ月

女郎花月　（顯昭法師）

七夕のちぎりの色にたぐへてや
名つけしこともふみなめし月

七　夕　月　（家隆朝臣）

鵲のより羽の橋も心せよ
七夕月のころまちえたり

めでぬひ月　（秘藏抄酒井人眞）

七月のめてゝあひ月ぞちえつゝ
いかに心のうれしかるらむ

七夜月（英傳抄）

彦星のけふや逢ふらんなゝよ月
七夜の空の宵のまされに

秋初月（仝上）

風なくは何とかいはむ松風の
秋のは月を音にこそしれ

米國に於ける我が二人の女學生

やて

牧野清子孃

余は前號に於て井口アグリ孃につきて記せり、今や他の一人なる牧野清子孃を紹介せんとす、即ち該新聞記者其の近狀を記して曰く、

海外萬里遠く故郷を去つてボストン女學校に体操の研究をなせる婦人ある、已に大に吾人の注意をひけるなるに、茲に亦インスチチユート、オブ、テクノロジーに於て、生物學顯微鏡を修めつゝある東洋婦人あるに至りては、寧ろ大に驚かざるを得ざるなり。是れ即ち牧野清子孃なり。孃は一見已に快活其の快活の性を表はし特に稍奇なる英語にて相談ずるに至りては、實に特種の興味を惹さしむるなり。

孃は目下セントポブラーなるエリサベス、ピーボディ氏の別邸に寄寓せるが、其快活の性は早くも近隣の小兒をして無二の親友とならしめたり。

茲に稍奇態なるは、此の若き婦人は前のハンテンハム通に在學せる井口孃と同じく東京なる女子高等師範學校の卒業生なり。されども本國に

ては互に相知らず、渡米も時を異にせし事なり牧野孃は獨立の女學生にして、目下美術博物館のカボット氏の爲めに、日本美術に關する記事を飜譯し、學資を得つゝあり。

孃は基督教信者にして、牧師マッキム氏の管督に係る、東京マーガレット神學校の紹介を以て留學せしなり。在郷中深く自然科學に興味を起し、頗る研鑽する處ありしが、猶斯學の蘊奥を極めんものと、留學の決心をなし、三人の從妹と共に横濱を出帆し直にシャトル市に上陸し、暫してノルスフィルドに來り、こゝに聖書地理英語の研究に專心怠らざりき。

かゝりし程にボストンは斯學研究の便宜よき場所なりと人の勸むるまゝに、紹介狀を持し單身當市に來たりしなり。此の勇膽なる日本婦人の

爲めに、適當の事業を與へ、其の成功を助けんと望みし米人許多ありし中にも、當時神學校に在りて目下はエール大學に在るアンソンステークス氏主として、此が盡力をなし、氏及其の他の人々の周旋に由り、此の美術博物館の事業を得るに至りしなり。されば孃は今後四ヶ年間同館に止まる事を約し傍ら其の目的とせる諸藝術科を修了せん事を期せりと。

記者更に孃を賞讃すらく

孃の云ふ所によれば、目下學校に於て、最も困難を感ずるは、技藝科なりと、されども孃が自然科學植物學鑛物學に於ける非常の興味と熱心とは、能く此等の困難を排して、其終極の成功を見ん事、吾人が信して疑はざる處なり。猶其の生物學科には、孃の外十名の女學生あれども

顯微鏡科には、女學生は只孃一人のみなりと。

次ぎに其の對話を寫して曰く。

日本に於ける女子教育の現況を問ひたるに、未だ高等なる學科を修むるもの尠なきを述べて云ふ樣

無論其内には、高等なる學校に入學するものもありまするし、師範學校に入りて教育者の資格を得るものもありますが、また單に家庭に於て英佛獨語和歌音樂茶の湯活花家事經濟などを習得するものもあるのです。

宗教は私の國では家庭教育の重なる部分を占めて居ります、オバーサンやオッカサンが常に家庭に於て、子供等に孔子の道を教へます

儒教は一般に信仰されて居ります、されど一般の學校教科の中には宗教はありません。

一千八百九十年十月卅日に、教育に關する勅語を下賜せられましてから、學校で教ふるものは凡て宗教以外になりました。私共は道德學として東西の英雄偉人の事蹟や婦人の理想までを教へられました。リンカンやワシントン　ナポレオン　ジアンダークやフローレンス　ナイチンゲールなど云ふ名は私が故郷に於てよく知つたものであります。

併し私は此等のすぐれた人々の事から、最も重大なる家庭教育と云ふ格段な職務に從事するのが、實は……實に私達女であると云ふ事を深く感じました。それで私は此の未來の母となり、未來の宗教を開發する所の我國女子の教育に身を委ねんとの志望を起しました。

私は己に故郷で其の教育をやつて見ました。妹は只今幼稚園の教師です。そして兄は札幌農科大學の卒業生です。これ（其の頸にかけたるリボンに結びたる奇異なる形のオマモリ樣のものを指して）は、兄が函館灣内のボートレースで賞與されたメタルです。

私は洋服は大好です、亞米利加のものは大概好きです。殊に此の夏は一月ばかりヨークハーバーのガーリソン家に寄寓して、又となく愉快な暮をしました。來年も亦是非參りたいと思ふて居ります。

ボストンも私には奇体に思はるゝ或る部分（之は俗塵深き西町を指せるなり）の外は非常によい處と思ひます

と終りに記者は孃を讃嘆すらく

吾人は牧野孃が我がグローヴ記者に應接せし其態度と、記者がやがて暇を告げて去らんとせし時、孃が自筆になれる華美なる日本畫の額面を示せし如き、其の隔意なさとを以て、日本人の愛嬌ありしかも禮法に嫻へる一例となすを得べきなり。

吾人は此の二人の日本婦人との一回の會見に於て、只僅に勇胆、耐忍、快活の諸德を認めたるのみなれども、此等親切にして交際に巧みなる日本婦人が、米國婦人に敎ふべき多くの事實あるを信して疑はざるなりと

譯者未だ二孃と一面の識なし、されど其の同情を寄するや切なり。況んや校を共にし鄕を同くし互に相識れる諸姉に於てをや、余は切に祈る、二孃が健全以て其素志を遂げ、國家敎育の爲め盡瘁せ

られん事を。完）

結婚論（承前）

野本生譯

人は、幾何の收入を得るに至りて始めて、結婚すべきものであるか、其は、元より、一定することは出來ぬ。何となれば、一ケ年僅に、六百弗の收入をもて、妻を娶りて、幸福なる生計を營なんで居るものもあれば、又、一千弗の歳入をもて、猶且借金に苦んで居る者もあるからである。其は畢竟、其の當人達の心掛如何によるのである、然れば、妻帶するには、六百弗の歳入を要すべきや八百弗にてよきや。將又、一千弗はなくて叶はぬや。といふやうな問題は、全く、其の當人と、其の女子との間に決すべきもので、局外者の他人には、到底、決し得らるべきものでない。然れど、予は、徒らに、金錢上の關係をもて此の問題を決するより、寧ろ、或る他の立脚點によりて、之れを解決することの優れるを主張する。貧苦の戀愛を好ましからざること、前已に述べたる如くなれど、年猶若き男女の。最低の楷段より起りて、漸次、最高の楷段に上り行くことの宜敷を信ずるのである。即ち、斯く、相携へて漸次、上部の生活に昇り行く事は、兩者の間をして、愈〻親密ならしめ、從て將來の幸福を安全ならしむるに最も便利であると思ふのである。若し、予にして、六百弗か、八百弗か、若しくは、一千弗の歳入ありて衷心一女子を愛し、且つ其の女子にして、正直勤儉にして猶ほ、適當の年齡に達し居らんには、予

は、此の女子をして、此の收入問題を決せしめんと思ふ。何となれは、女子は極めて愼重なる方法によりて、容易く、此の種の疑を決することが出來るからである。以上は、此問題に關して、予及び、他の記者等の說述し得る範圍にして、是より以下は、各人、自ら決するより外に仕方がないのである。記者の說述したるところは、記者自ら善しと認め、安全なりと思惟せる概則を指示せるに過ぎないのであるから、讀者諸君は、各箇人の事情必要に應じて、此の概則を取捨すること勿論である。然れど、猶ほ一言したきは、青年諸士の女流を信ずること飽迄强固にして又、結婚を視るを極めて神聖でなくてはならぬことである。且つ又、結婚は、其の各方面が、華美艶麗にして、常に、紅色を帶べりと思ふべからず。必ずや、紫色なる時あれば、時に或は暗黑なる陰影を生ずること又無きを保せず。人事、素と、意の如くならず。困苦、憂悶、孰れも、無き能はず。然れば、結婚、獨、此の軌道の外に逸すること能はざるなり。我等、人類社會、現時の隆盛は、全く結婚即ち婦女子の愛戀に因れる事前已に述ぶるが如し。然れど人、女を娶りて後、時に或は、彼の女の費多きを怪むべく、兩者の間、其の思惑、全く相反して、時には癪に觸はることもあるべく、從て又、小言をいふこともあるべし。去れば、翌朝の出勤に言葉も交へずに家を出づることもあるべく、又或時は、打連れて、外出せんとするに、彼の女の仕度の、餘りに手間取りて、腹立たしき時もあるべし。又已が好まぬに、妻の方が外出せんと促す時もあるべく、永き間には「女は一躰、奇妙なもの

だが、汝は又格別だ」といふやうな、さまづい事もいふであらうし、又、後では非常に氣の毒に思ふが、一時は、大に怒ることもあるであらう。又、折角、家に歸りても、妻の姿が見えなかつたり、或は、時分時に食事の仕度が出來て居らなかつたりするので、腹の立つこともあらう。併し、畢竟、人は己れ自らに、斯く語るべし「予が妻は天使の如きものなり、彼れは、予が爲めに、最善なるものと最善ならざるものとを能く知れり、彼れは、何事も犧牲てふ眼光をもて視ることをしない。彼れは實に、予が日常の慰籍者なり、病苦には予を慰安介抱し、困苦には希望の星となりて、予を指導す、予が、粗暴に走るの時、彼れは、細心、警戒を怠らず、予、又、輕ろ〳〵しく、人を信じ、生命を危くするの時、彼れは、一瞥、能く、對手の心底を透觀し、其が性格を看破して、予を守るべし。嗚呼、妻は到底愛すべきものなり。缺點？、勿論、これあり、然れど、予も亦、是れを有す。而も、其の多くをもてり。彼れが、凡べての缺點は、予これを知れり、而も、彼れは、予が缺點を知らざるもの〻如く、常に、予が善き點のみを語るなり。彼の女は、到底、最善なり、最良なり。

（完結）

七夕節句生

來る七日は五節句の一つで七夕と申します。夜になつて乞巧奠即ち七夕祭をいたすのであります。德川時代には、五節句は皆大切な祝日であり

ましたから、此の日に諸大名[illegible]辰の刻に白帷子の長上下で參賀のため御登城になつた事は、三月上巳の儀式通りでありまして。下々一般の者も之に準じて祭つたのであります。

一寸其の祭の樣を言つて見ますれば、昔は其前日の六日に稻の葉をとりまして、之に詩や歌を書きまして、又其に五色の絲などを添へて、牽牛、織女の二星に捧げ、誰も〳〵自分が巧になる樣に乞ひましたが、近い頃になりましては五色の紙を色紙形短冊形に作る、其れに七夕の古歌を書きまして笹の葉に結び付けて、軒先に高く掲げます、或は其に紙を剪つて網の形にした物や、菓物や瓜、筆其の他種々の形を作りまして、竹に懸ける樣になりました。夫れ故に手習子供は五六日前から、七夕の詩や歌を習ひ、又硯机を洗ひ等して各自

に手跡の上達する樣に、二星に祈るといふ志を表はしましたが、今日は此の風俗も東京市内には極めて稀になりまして田舍に行く程まだ盛であります。

この事の初は、我が國は今から千百五十年許前で孝謙天皇の天平勝寶七年だそうであります。其の時の禁中の樣子は「乞巧奠先七日なれば、藏人御調度を拂ひ拭ひ、夜に入て乞巧奠あり御殿(淸涼殿也)の庭に机四脚を立て燈臺九本各燈火あり。机の上に色々の物をすゑたり。箏の琴、琴柱を立て之を置く。机の上に火とりに、終夜空燒物あり。盥に水を入れて大空の星をうつす云々」(公事根源)とあります。斯樣に上にも下にも一般に行はれた風でありましたから、歌にも多く咏まれ文にも作られまして、文學の上には和漢共に中々

勢力がありました。

終夜星合の空に奉る香の、
　煙や雲の初なるならん（仲正朝臣）

白露の玉のおごとの手向して、
　庭にかゝぐる秋の燈（常盤井入道）

七夕のあふ夜の庭におくことの、
　あたりにひくはさゝかにの糸（寂蓮）

聞かばやな二の星の物語、
　たらゐの水にうつらましかば（建禮門院）

さて此の二星の事は、支那の古い俗説から出て支那も早くから盛に其の祭を致しました風が我が國に入いつたのであります。其の俗説と言ひましても少々異同はありますが、誰も御承知の通り大概次の通りであります。（天の河の東に、麗はしい一人の處女がありました。其れは天帝の愛子（一説には孫とある）でありまして、常に機ばかり織つて居まして毎日毎月毎年働き續けに働いて、雲霧の絹縑の衣を織成して、更に歡樂といふことはなく其の美しい容姿をつくる程の暇さへなかつたのを、其の親たる天帝は、いたく其の獨住のつれなさを憐れに思召されまして、天の河の西に居ります牽牛と結婚させて下さいました。夫れからは織女の喜びは大したものでありまして、以前の骨折つゞけの苦しみは、全然喜び續けの樂と變りまして、大切な自分の職分たる絹織る女功は廢めて仕舞ひ、今度は綠の髪に花の顏、それの化粧が朝暮の仕事と變つたのであります。さあ之を見られた天帝の御立腹は一通や二通でありません。織女を前の通り河の東に呼還して、女功を勸めさせ、但一年に一度この日の晩に牽牛に會はせるのであります」。此の

事を詩や歌に作つたものは澤山あります。

織女牽牛雙扇開、年々一度過レ河來。

天の川遠さわたりにあらねども、
君が船出は年にこそ待て。

淺からぬちぎりとぞ思ふ天の川、
あふせは年に一夜なれとも。

七夕のながき思ひも苦しきに、
此の瀨をかぎれ天の川浪。

◉九重の御消息

●親王御降誕　竹の園生の御榮、いやが上にも生ひ茂らせ給ふ事、めでたしともめでたし。皇太子妃殿下には　先月二十五日午前七時三十分御分娩第二皇孫殿下御降誕、兩殿下とも此上なく御健祥に在らせらるゝ御由、當日は、妃殿下の御誕生日に當らせらるゝとは、目出たさが上にも目出たさ御慶事と申し奉る外なし、尙

●御命名式日　は七月一日御擧行あらせらるゝ趣にて當日は宮中皇靈殿賢所神殿に於て奉告の御